図書館だより

2014.12
No. 22

長崎県立大学佐世保校附属図書館

〒858-8580　佐世保市川下町123
TEL 0956-47-2191（代表）
http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/

楠井隆三のこと

山　崎　好　裕

福岡大学教授（経済学部・大学院経済学研究科）

楠井隆三という経済学者のことを書こうと思う。

楠井は1899年和歌山県那賀郡池田村（現紀の川市打田）に生まれ、1991年に没した。楠井と長崎県立大学の関係は、1967年に長崎県立短期大学商英部が長崎県立国際経済大学（1991年に長崎県立大学に改称）に昇格すると同時に、「経済原論」の担当者として赴任したことである。同年関西学院大学を定年退職しての異動であった。

担当した「経済原論」はⅠとⅡに分かれていて、Ⅰ・Ⅱとも通年でそれぞれ2年生と3年生に開講されていた。Ⅰの方では、テキストにサミュエルソンの『経済学』（都留重人訳、岩波書店）と、佐賀出身の著名な経済学者、高田保馬の『経済学概説（新版）』（有斐閣）を用いて、専門教育への準備をするというのが目的となっていた。Ⅱの方では、経済の分配原理を一貫して講義している。

分配原理といっても、所得分配の内容や枠組みの関係でミクロ経済学とマクロ経済学を講義しようという試みである。まず、ミクロの方では価格理論や生産理論との関係で分配を考えるということで、利潤や利子、地代、賃金などの所得の分類が説明される。マクロの方では、国民所得についての説明が行われた後に、経済成長と所得分配の関係が述べられる。

ただし、現在の観点から見て特徴的なのは、後半部で社会主義、ないし、団体経済の分配原理が述べられるという点である。これは当時の年輩の経済学者が、いわゆる近代経済学（新古典派理論を中心とする現代的な経済理論）とマルクス経済学を共によく論じえたということが理由の一つであるが、それだけではなく楠井の本来の研究分野と密接に関係している。

楠井の主著は1939年に有斐閣から出版された大著『理論経済学認識論』である。この書名を見ても、専門としていた分野が、経済哲学、経済学方法論、価値論（経済的価値とは何か？）などを中心とする抽象的で特殊なものであることがわかるであろう。その分、楠井は経済学全般に関する広い知識を持たなくてはならなかった。

楠井は日本における経済哲学の創始者、左右田喜一郎から大きな影響を受けたが、経済学と経済哲学が相補わなければならないこと、貨幣的関係のみならず、社会的全再生産過程が経済学の対象であるべきこと、という持論を持っていた。

そもそも、筆者が楠井について知るきっかけとなったのは、戦前・戦中の外地帝国大学における経済学研究について調査したことであった。1926年、東京帝国大学大学院を修了（博士学位は1945年慶應義塾大学より）した楠井は、台北高等学校教授、台北帝国大

『理論経済学認識論』

経済学者　楠井隆三

学文政学部助教授を経て、1930年、同教授に就任した。終戦まで経済学第1・2講座を担当したが、1946年日本に戻り関西学院大学教授となったのである。ちなみに、楠井は20歳のときに洗礼を受けている。

楠井は台湾現地生まれの研究者、東嘉生とともにマルサスの『穀物条例論』・『地代論』を翻訳しており、1940年に岩波文庫に収められた。東にはそれらについての研究論文があるが、初めて内地を訪れた後の台湾への帰途、客船が米軍の爆撃を受けて夭折した。

筆者と同じで、俳句を趣味とし、生前3冊の句集を出版している楠井である。長崎県立大学にも深い関わりのある経済学者でもあり、今後業績の再評価が進むことを期待している。

英語100万語多読コーナー

竹田津　　進
（地域政策学科教授）

長崎市の稲佐山。山頂からの夜景は、100万ドルとも讃えられる、日本三大夜景の一つです。「100万ドルの夜景」は、神戸は六甲山からの眺めがその起源、当時神戸市の電灯のひと月の電気代が、ドル換算で100万ドルだったとか。100万は大きな数の誇張に使う語呂の良い枕詞。京都の百万遍智恩寺や、歌詞をもじった「君の瞳は100万ボルト」、ラジオで「百万人の英語」もありました。

100万を冠した言葉なら、英語教育の世界でも近年ブームです。それは「100万語多読」。易しい読み物を、辞書を使わず、英語を英語として読む、直読直解の読書法です。100万語というと、本校のシンボル、鵬の「ひと飛び九万里」のように、荒唐無稽で誇大な数字に聞こえますが、ペーパーバックの小説なら、約10冊。英語を日常的に読む人には、過大な数字でもなさそうですが、学習者には、刺激的な到達目標かもしれません。

多読教材には、Ladybird BooksやOxford Bookwormsなど、幼児の絵本から、児童用に易しく書かれた、レベル別リトールド版(Retold Books) の上級まで多種多様。『ガリバー旅行記』や『若草物語』、『赤毛のアン』（その翻訳者の半生記が朝ドラ『花子とアン』）

など英米の名作から、『忍者の秘密』というような新作書き下ろしまで、あまた網羅。昨年度、英語特任教員（楠元、ライフ、ケイン、ローソン）のご尽力で、リトールド教材が多数収蔵されました。それでも数千冊の蔵書を誇る大学もありますから、さらなる充実を期したいと思います。

名作や新作を、易しい英語で、しかも短時間で完読できる教材は、クリステルさんの言葉を借りれば、おもてなしの入門図書。歴史作家の司馬遼太郎さんは、新しいテーマで小説を書くときは、まず子供向けの基本図書を読み、大筋を掴んでから、専門文献を読破したとか。入門書の効用、恐るべし！

この100万語多読は、全国津々浦々、授業や課外で多くの教師が実践中。大学での取組みも盛んです。宇都宮大学で、斬新な英語教育改革があったのは数年前（略称EPUU、「大学英語教育学会賞」を受賞）。その宇大のリーディング・ラボを始め、大学図書館の多読コーナー設置の例は、枚挙に暇がありません。

本学でも、英語多読コーナーの設置を是非とも実現させたいものです。図書館4階への階段を登ってすぐ左の壁際に、静かに鎮座ましますのが、同階の奥深くにある専門洋書の棚から、最近引っ越したばかりの多読教材。4階は学術・専門洋書のフロアーですから、英語の文庫本とも言えるリトールド本は、多くの人に読んでもらうには、4階より2階あたりの、目に触れ手に取りやすく、くつろいだ雰囲気の場所への配置が望ましく、配架の再検討を要望中です。

実現すれば、いつでも気軽に、易しい英語に没頭できる環境が整いますから、宝の持ち腐れにならないように有効活用し、英語力を高め、英語の基礎教養の涵養に努めてほしいと願っています。

耳を澄ませば、長崎は稲佐山の方角から、世界を席巻せんとした、海援隊のあの人の凛とした声が今にも聞こえてきそうです。「わしはエゲレスとメリケンの言葉はまっこと苦手じゃきに、おまんらは百万語多読を実践し、エゲレス語の修練に励んで、世界に羽ばたく鵬にならんといかんぜよ！」

たかが英語orされど英語
～英語学習を楽しむために～

麻　生　雄　治
（地域政策学科講師）

「たかが英語！」この衝撃的な見出しは、楽天社長三木谷氏の著書（三木谷浩史『たかが英語!』講談社）である。社内英語公用化を実現したことは有名な話である。2年以内に役職ごとに設定されたTOEICのスコアをクリアしないと有能であっても昇進できない、それどころか降格もありうるという楽天英語化プロジェクトである。わずか1年半の間で社員全員の平均点が160点上がったことは評価できるが、それ以上に、全社員が、文句を言いながらの人もいただろうが、一斉に英語の勉強に取り組んだことが素晴らしい。「昇進のため」という外発的動機づけだけで英語漬けになれるものだろうか。彼の仮説によると、1000時間英語に触れると英語習得が可能という。1日2時間の英語学習を2年間続けると、1000時間を軽く超えることになる。（普通科進学校に通った人は中学と高校の英語授業だけで約1000時間だが・・・。）

いや、英語だけできてもだめ、それだけではよい仕事はできないと説くのは日本マイクロソフト社元社長の成毛氏。彼は、日本の英語教育が日本人をダメにしていると指摘している（成毛眞『日本人の9割に英語はいらない』祥伝社）。日本の英語教育の問題点の一つとして、文法を重視しすぎる点を挙げている。しかし、外国語として英語を学ぶ人にとって文法を完全に無視できるだろうか。コミュニケーション力育成にあっても文法は下位能力として必要であるとする意見もある（大津由紀夫（編）『学習英文法を見直したい』研究社）。また、ネイティブ・スピーカーのマネをすればよいというわけではなく、中学・高校で習った英文法をベースにした英語力を生かして、英語を話すときのちょっとしたコツや心得を取り入れて、日々のトレーニングをするのがよいという考えもある（マーシャ・クラッカワー『日本人の英語力』小学館101新書）。

ちょっとしたコツとはどんなものだろうか。例えば、喫茶店で飲み物を注文するときの「じゃ、私はコーヒー」を英語でI am coffee.（私の名前はコーヒーです）（田地野彰『意味順英作文のすすめ』岩波ジュニア新書）とか、昨日の夕食を聞かれて「昨日は鶏肉よ」を英語でI ate a chicken.（鶏を丸ごと1羽食べたのよ）（マーク・ピーターセン『日本人の英語』

岩波新書）と言っては真意が伝わらない。このような英語にならないようにこれらの本は上手に解説している。

英語の勉強法に関するハウツー本は数多く出版されているが、『村上式シンプル英語勉強法』（村上憲郎、ダイヤモンド社）は具体的な内容で取り組みやすい。単語力を強化するには『英単語「比較」学習帳』（ケリー伊藤、宝島社新書）がおもしろい。使い分けで誤りやすい単語が整理されている。また、英文読解力を磨くためには『解釈に強くなるための英文50』（行方昭夫、岩波ジュニア新書）がお薦めである。難解な英文に対して、先生と生徒との対話による詳細な解説があり勉強しやすい。

英語教育（英語学習）が日本の社会の中でこれほど議論されたことはないと思われるが、いつの時代にあっても言語を習得することはそれほど簡単なことではなく、苦労しながら、誤りを繰り返しながら上達していくものである。ネルソン・マンデラ氏の有名な言葉に“Do not judge me by my successes, judge me by how many times I fell down and got back up again.”がある。言語習得にも通ずると思われる。かく言う自分もいまだに誤りを繰り返しながら、なかなか英語すら習得できないでいる。「たかが英語」だが、一方で、「されど英語」でもある（三木谷、前述）。上述の本を英語学習の合間に読むと少なからず英語学習が楽しくなる（はずである）、と期待する。

『学生に勧めたい一冊』

矢　野　生　子
（経済学科教授）

百田尚樹　著
『海賊とよばれた男』
(上下)
講談社　2012年

百田尚樹氏の作品としては、昨年12月に映画化された「永遠の0」が有名ですが、この「海賊とよばれた男（上・下）」も第10回（2013年）の本屋大賞を受賞した大変有名な作品です。発行部数も2014年7月現在、単行本で190万部、文庫版で142万部、合計330万部を超えており、既に読まれた方も多いのではないかと思います。

この本は、出光興産の創業者である出光佐三氏をモデルにした長編小説です。

上巻は、第二次世界大戦の敗戦直後の混乱の中、石油販売会社である国岡商店がGHQの管理のもとで様々な苦労を重ねながら、会社を立て直していく過程が描かれています。上巻の前半における見所の１つとして、敗戦直後、石油輸入を再三要請する日本政府に対して「旧海軍のタンク底の油を浚わない限りはアメリカから石油を輸出しない」というGHQの嫌がらせとしか思えない条件に国岡商店が唯一立ち向かったというエピソードがあります。タンク底の油を浚う作業の過酷さは筆舌に尽くしがたいものでした。（ここで佐世保も出てきます）。しかし、この過酷な作業が後に国岡商店を救うことになります。また、上巻の後半は、主人公である国岡鐵造（くにおかてつぞう）の半生が回想という形で描かれています。

上巻においては、GHQや石統(石油配給統制会社)との戦いでしたが、下巻では、世界の石油エネルギーを牛耳り、国岡商店以外の日本国内の石油販売会社をすべて傘下に入れた巨大石油資本（メジャー）との戦いになります。戦後世界の石油を牛耳っていたのは、

「セブン・シスターズ（七人の魔女）」と呼ばれた巨大石油会社でした。その力はあまりにも大きく、日本の民族会社である国岡商店など太刀打ちできる相手ではありませんでした。しかし、国岡商店が世界中を驚かせる大事件を起こします。これが1953年（昭和28年）の「日章丸事件」です。長年イランで石油開発をおこなっていた「セブン・シスターズ」の1つである英国のアングロイラニアン社（BPの前身）が、石油を国有化しようとしたイランと対立し、イギリスはイランを経済封鎖してしまいました。「イランから石油を輸入しようとするタンカーは撃沈も辞さない」とするイギリスに対して経済封鎖によって困窮していたイランから日本へ石油を輸入することを成功させたのが国岡商店だったのです。

この大作戦はまさに日本版「ミッション・インポッシブル」です。「イランからイギリス海軍の目を掻い潜って日本に石油を運びました。」と一言で言えば簡単ですが、実際は不可能としか思えないことだったのです。まず契約のため秘密裏に国交のないイランに向かうことだけでも大変です。そして、輸入するための外貨（ドル）も当時の日本にはありませんでした。外貨の量は制限されていたので、「外貨割り当て」を政府に申請する必要があったのです。さらに貿易取引に必要不可欠な保険やL/C（Letter of Credit:信用状）を手に入れるのも至難の業でした。最後に日本に石油を運んだ国岡商店を待っていたのは、アングロイラニアン社との法廷闘争でした。

この作戦が成功したのは、多くの社員が自分の出来ることを命がけでおこなったからでした。恐らく、当時のマスコミはこの事件のヒーローとして国岡社長と日章丸の船長を取り上げたことでしょうが、その背後には注目されなかった多くの人々の努力があったのです。

この本を読んで様々な感じ方があると思いますが、ミッションを成功させるために必死で努力した社員一人一人の活躍に注目して欲しいと思います。きっと、「社会人って大変だけどかっこいいなぁ」と思っていただけるのではないかと思います。さらに、「戦後世界で最も貧しい国の1つ」となった日本を世界第二位の経済大国にまで復興・発展させた先人たちのたくましさと努力を尊敬の念を持って感じて欲しいと思います。

本の紹介

山　口　夕妃子
（流通・経営学科教授）

今回紹介させていただくのは5巻本として白桃書房から2013年に出版された本です。これらは日本流通学会設立25周年記念出版として学会員の先生方が中心となり、５１名の先生方が執筆に関わり完成したものです。

第1巻の佐々木保幸・番場博之編『地域の再生と流通・まちづくり』では、地域商業の抱える課題を「地域再生」という切り口から地域再生に接近する理論や歴史、流通政策の役割についての考察を行っています。また地域に生起する具体的な諸問題に関連させて地域再生の現状と課題についての検討も行っています。

第2巻の吉村純一・竹濱朝美編『流通動態と消費者の時代』では、流通と消費をとりまく問題を中心に取り扱っています。現代消費を解明するための理論的枠組みの再検討や消費者をとりまく環境が変化し、そこに影響される消費者像を多面的な側面からの考察を行っています。そこには消費者が受動的な役割を引き受けてきたという側面ではなく、積極的に流通過程に参加する消費者の姿を見出すことができます。

第3巻の小野雅之・佐久間英俊編『商品の安全性と社会的責任』では、近年多様化・複雑化している食品の安全問題を社会的責任の視点から取り上げ、課題やその背景を明らかにするとともに、消費者の立場にたって問題の解決の展望を示しています。企業側ＣＳＲやソーシャル・マーケティングの取り組み、商品別の安全性の検討、消費者の役割や課題についても具体的な論を展開しています。

第4巻の木立真直・齋藤雅道編『製配販をめぐる対抗と協調－サプライチェーン統合の現段階―』では、現代流通における変化を製配販統合やサプライチェーン統合といった視点から考察しています。チャネル論、情報論、ネットワーク論などの既存理論から今後の研究課題を検討したり、様々な産業からの動態的変化を実証分析したり、コーディネータ別のサプライチェーン統合や製配販統合の実態を明らかにしています。

第5巻の大石芳裕・山口夕妃子編『グローバル・マーケティングの新展開』では、グローバルなマーケティング問題を理論的な考察と実証的な分析といった側面から論を展開しています。個々の産業あるいは企業の事例をあげ、グローバル・マーケティングの示唆的・論理的特徴を考察しています。

以上紙面の関係上簡単な説明しかできませんでしたが、5巻51章で構成されています。51もの様々な切り口から日本の流通・マーケティングに関する問題や課題を論理的・実証的に明らかにし、その解決の糸口を見出そ

うとした意欲的な論文集です。私自身、大学院時代から国際マーケティングという領域の研究を行ってきました。今回は5巻の『グローバル・マーケティングの新展開』のなかで「ｅコーマースの新展開」という章を担当しています。自分自身の研究テーマから少し一歩踏み出したと思う分野への挑戦でした。稚拙ではありますが、今後研究を深めていきたい分野と出会えたことをうれしく思いますし、またそのような機会をこのような学会プロジェクトで頂けたこともうれしく思っています。

みなさんは流通・マーケティングの分野のどの領域に関心があるのでしょうか？関心のあるテーマの巻を手に取って読んでみてください。また関心のない人もこの私の文章を読んで興味のあるところがあれば、うれしく思いますし、ぜひその巻を読んでみてください。もちろん1巻から読んでいただいてもいいですし、関心のある巻から読んでいただいてもかまいません。この紹介文を通じて、少しでも流通・マーケティングに関心をもってもらえれば幸いです。

印象に残っている二冊の本

青　木　圭　介
（経済学科教授）

二人のノーベル経済学賞を受賞した碩学による書籍について私の思うところをお伝えしましょう。一人はポール・サミュエルソン（1915～2009）、もう一人はゲーリー・ベッカー（1930～2014）両教授です。

1970年にノーベル経済学賞を受賞したポール・サミュエルソンが1948年に出版した『Economics：An Introductory Analysis』

(訳本の初版は都留重人により1967年に出版)は私にとっては古典の領域に入る大変有名な著書で，私より一・二世代上の経済学を志した諸先輩方にとっては，さしずめ現在のマンキューかスティグリッツ、もしくはハバードという誰もが一度は目を通すバイブル的な経済学の指南書であり、諸先輩方にとっては学生時代の思い出を少なからず思い起こさせてくれる一冊ではないでしょうか。私が大学院生の時、ケインズ経済学からの系譜に連なる新古典派総合の創始者であるサミュエルソン経済学に触れることも大事かと思い、ある日の夕暮れ六甲の図書館地下にある書庫で古びた一冊を手に取りました。経済学の指南書としてはやや難解ですが，示されている理論は今日大学の教壇で教えられている経済学の基本的な考え方を余すところなく説いたものであります。説かれている内容についてはこれから手にする読者の皆さん自身の理解に委ねますが，妙に私の印象に残っているのは所々に挟まれているコラムでした。そのコラムの一つに、ある街でもっとも優秀な弁護士とその秘書（タイピスト）が登場します。その弁護士は自身の有する弁護士能力においては他に右に出るものは居ない程優れていました。弁護士の仕事をする上では様々な書類の作成が不可欠であるが，そのための時間が惜しいと思っていた彼は必要な書類を作成するタイピスト（秘書）を雇おうと募集するのです。もちろんタイピングに自信のある女性が応募して来ますが彼女のタイピング技術はその弁護士のそれよりも劣っていました。もちろん彼女には弁護士の資格はありません。にもかかわらず、弁護士は自分よりタイピング技術の劣る彼女を自身のタイピストとして雇うのです。彼は彼女を雇うことで自らが弁護士活動に専念でき，全体としてはより大きなメリットをもたらすと判断したのです。ここまで紹介すると少なからず経済学に触れた人であれば誰しもデヴィッド・リカード（1772～1823）の比較生産費説（比較優位論）を思い浮かべるでしょう（『経済学および課税の原理』(On the Principles of Political Economy, and Taxation) 1817年)。そう、比較優位論では両面において絶対優位であっても、より比較優位にあることに特化した方が全体的にみればより大きな利益を得られることを説いています。重商主義が世を席巻していた18世紀のイギリスで、絶対優位に従った行動では必ずしも思うような利益を生まないことを知らしめた革新的な理論でした。このコラムで紹介された例は、弁護士能力に著しく優れた能力をもつ弁護士は、たとえ自分より技量が劣るタイピストであっても自らが行っていたタイピング作業を彼女に委ねることで生じた時間を弁護士活動に専念することで、より大きな利益を得られると判断したのです。リカードがワインとラシャで例えた比較優位論をより身近な例えで解説したコラムでした。

実は私の心に刻まれたポイントはそこではないのです。サミュエルソンのこのコラムに出会ったとき、大学院で経済学の道を志す私は今後学者としてやっていけるのかがやや不安であった時期でもありました。そう、私はここに登場するタイピストかもしれない。しかし、技量に劣るタイピストであっても自らが得意とする分野に特化することで図らずも社会全体としてはより大きな利益をもたらすことがあり得ると、当時悩んでいた自分に前へ進む勇気を与えてくれたのです。歌の歌詞ではないですが、ナンバーワンにならずともオンリーワンでも世に貢献できると思えた瞬間でした。

もう一冊印象に残っている書籍はゲーリー・ベッカー教授によるものです。1992年にノーベル経済学賞を受賞したこの碩学は1964年に『Human Capital：人的資本』という本を出版しています。(訳本『人的資本--教育を中心とした理論的・経験的分析』(東洋

経済新報社、1976年））そこから得られるものを私なりに例えると、現在の金利水準ではほど遠いですが預金金利が年5%とすると、1億円を銀行に預けると年に500万円の利息がもらえます。これを逆から考えると，500万円の利息は1億円の資産から生まれるということです。あなたが働いて1年間に500万円の収入を得るとしましょう。無から有が生まれないとすれば、この500万円もまた、1億円の銀行預金に匹敵する何らかの資産から生じているはずです。この資産、すなわち労働を生み出す個人の能力を人的資本と呼びます。ベッカー教授はこの著書の中で、「健康や人間関係をも含めた広い意味での人的資本が社会の富の大半を占めている。それに比べると預金の多寡やマイホームの有無に何の意味もない。裕福な資産家は別として、世の中のほとんどの人は人的資本を上回る実物資産を持つことはない。そうであるならわずかな預金を増やそうと苦心惨憺するよりも、大きな富を生む人的資本にこそ投資すべきである。」と述べています。

ここでも先に紹介したリカードの理論が頭に浮かびます。リカードの考え方は，国家に限らず、企業でも個人でも、誰もが自分の得意とする分野で努力すれば全員が幸福になれる。社会は弱肉強食の世界ではなく、人々は自分の得意技（優位性）を交換し合って豊かになれることを教えています。人は誰もが大なり小なり必ず自分の優位性をもっています。人的資本への投資とは，テストでよい点数を取ることや資格の数を増やすことではなく、自分だけの優位性を研ぎ澄ますことだと私は思います。

今回紹介した本は、本学で経済学を学ばれる皆さんにとって、経済学の考え方を用いながら社会に出る前の準備として、まずは自分の好きなもの、優位性は何なのか，それを磨くには何をすればいいのかということを考えるきっかけになる書籍かもしれません。

平成26年度 学生による選書ツアー 実施報告

9月1日（月）福岡市天神にあるジュンク堂書店福岡店へ、学生と教職員合わせて14名で行ってきました。

選書購入した450冊の本は、附属図書館3Ｆの階段横に配架しております。（写真）

どうぞご利用ください。

◆附属図書館HPアドレス　http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/

- 当館は本学学生以外の方でも県内にお住まいの15歳以上の方は利用できます。
- 開館時間／平　日：午前8時30分～午後10時まで（学生の休業期間中は午前9時～午後5時まで）
  土曜日：午前9時～午後5時まで
  休館日：日曜日・祝祭日・開学記念日（6/4）

編集・発行責任／長崎県立大学佐世保校附属図書館運営委員会　発行日／2014年12月15日